

第3節 全体計画の作成

1 全体計画の基本的な考え方

キャリア教育は、特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な学校教育全体の活動を通じて体系的に行われるものである。

各学校においては、生徒や地域の実態に応じて学校ごとに焦点化・重点化して、全体計画の作成に当たっていくことが望まれる。

全体計画に盛り込むべき項目の例を以下に示す。

- | | | |
|-------------------------------|----------------------|-------------|
| ① 必須の要件として記すべき事柄 | ・各学校において定めるキャリア教育の目標 | ・教育内容と方法 |
| | ・育成すべき能力や態度 | ・各教科等との関連 |
| ② 基本的な内容や方針等を概括的に示す事柄 | ・学習活動 | ・指導体制 |
| | | ・学習の評価 |
| ③ その他、各学校が全体計画を示す上で必要と考えられる事柄 | ・学校の教育目標 | ・該当年度の重点目標 |
| | ・地域の实態と願ひ | ・生徒の実態 |
| | ・教職員の願ひ | ・保護者の願ひ |
| | ・通学区小中学校等との連携 | ・近隣高等学校との連携 |

学校の教育活動全体を通してキャリア教育に取り組むためには、キャリア教育の全体計画の作成が必要であるが、教育活動の基本的な在り方や事項相互の関係が簡単に把握できるよう、記述や表現を工夫することが肝要である。計画を実践した後は全体計画そのものを評価し、改善する必要がある。また、評価に当たっては、活動そのものの評価とともに、育成すべき能力や態度から評価し、次年度の指導計画の改善に役立てるようにすることが大切である。

2 各学校において定めるキャリア教育の目標

キャリア教育の計画を立案するに当たっては、まず、学校が使命としてもつ全体的な教育目標を踏まえつつ、自校の生徒におけるキャリア発達上の課題、育成すべき能力や態度の明確な把握とその焦点化・重点化に基づいて、自校のキャリア教育の目標を設定する必要がある。

キャリア教育の目標を設定する際に留意すべきこととして、次のような点が考えられる。

- | |
|---|
| ① 日常生活や学習の特徴、人間関係形成の様子、集団活動における活動、勤労生産的な活動に対する意識などの分析や、生徒・保護者へのアンケートにより実態を把握することで、育成すべき能力や態度について検討する。 |
| ② 学校評議員や学校関係者評価委員の意見を聞いたり、地域産業界や住民の意見を聞いたりしながら、学校の課題や学校教育に対する思いや願ひを把握する。 |
| ③ 通学区内における中学校の生徒の実態及び職場体験活動の状況を調べ、生徒の実態に即して高等学校段階で育成すべき能力や態度について検討する。 |
| ④ 各学年の生徒の実態に基づいた目標を設定する。 |

キャリア発達には学校差や地域差もあるので、様々な角度から実態を分析した上で、各学校におけるキャリア教育の目標を設定する必要がある。例えば次のような例が考えられる。

(1) 生活環境を考慮した目標設定の工夫

- 商店街や交通の発達している地域では、商店街の理事や商工会議所の方などとの連携を深め、日常生活と学校教育で計画しているインターンシップのような体験活動とを結び付ける。
- 都市部で生活している生徒には、多様な人間関係を形成する能力を育成する場が比較的少ないことも想定されることから、特別活動などの時間を通して、幼児、高齢者、障害のある人などとの触れ合いの場を積極的に設けること等により、「人間関係形成・社会形成能力」の育成に焦点をあてることが考えられる。
- 商店街や交通網が未発達な地域では、その地域の自然や伝統芸能などを生かし、地域に根付いた特性を生かした目標設定が考えられる。
- 自然環境や産業の特徴が見られる地域では、豊かな自然や産業を大切にしている意識や態度を盛り込むことが考えられる。
- 学年に応じて、異なった環境で生活している学校との交流を図りながら、視野を広げ、情報を適切に活用する能力や人間関係を形成する能力を育むための目標を設定することが考えられる。

(2) 生徒の実態や学科・設置形態などの特色を考慮した目標設定の工夫

- 高等教育への進学希望者の中には、将来の生き方・働き方について考え、選択・決定することを先送りする傾向が強く、多くの生徒にとって、高等学校は高等教育機関へのいわば通過点となり、進路意識や目的意識が希薄なままとりあえず進学している者がいる状況がうかがえる。また進学希望者の多い普通科においては、将来の職業選択はさておき、高等教育機関、特に選抜制の強い大学への進学を第一とした指導に偏りがちであるという指摘もある。進学希望者の多い普通科においては特に、キャリア教育の総合的な活性化を図り、進学後の将来を見通した「キャリアプランニング能力」をはじめとする「基礎的・汎用的能力」の全般的向上を目指す必要がある。
- 一方、普通科から就職する者も依然として多く存在しているが、学科別の就職状況を見ると、普通科は他の学科と比べて厳しい状況に置かれているのが最近の傾向である。就職を希望する生徒が一定数在籍する普通科においては、希望する職業や職種に関連の深い事業所等でのインターンシップの充実や職業科目の履修機会の拡大を図りつつ、社会人として通用するコミュニケーション能力など、「仕事に就くこと」をより具体的に意識した能力の育成に力を注ぐことなどが考えられる。
- 学校の授業を十分に理解することができていない生徒や欠席が目立つ生徒など、将来の自立への支援が特に必要な生徒に対しては、基礎学力の育成を十分に図ることに並行して、インターンシップを含めた体験的な活動を増やし、「やればできる」という実感をもたせることが必要であり、学校への定着を図るといった観点から、キャリア教育の取組の充実によって学習意欲の向上につなげていくことが求められる。
- 職業に関する専門学科においては、職業教育とキャリア教育を混同し、職業教育を行えばキャリア教育を実施したことになるという誤った理解もかつて少なくなかったことなどを踏まえ、キャリア教育の確固たる目標を定め、意図的・計画的な実践につなげる必要がある。その際、基礎的・汎用的能力が「仕事に就くこと」に焦点を当て、実際の行動として表れるという観点から構想されたものであることを改めて認識し、職業人として求められる具体的な行動をキャリア教育の目標として定め、学校や学科として育成する人材像の柱としていくことなどが考えられる。
- 総合学科は、将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深めさせる学習を重視することや、生徒の個性を生かした主体的な学習を通して、学ぶことの楽しさや成就感を体験させる学習を可能にすることを特色としており、「産業社会と人間」における取組をはじめ、多様なキャリア教育を実践している学校が多い。しかし、導入当時に期待されていた教育の特色を生かし、その役割を果たすことができているかどうかを含め、現時点での成果と課題の検証が必要であるとも指摘されている。その際、総合的に選択科目群を開設し、生徒の個性を生かした主体的な選択による学習が可能となっているか、科目選択のための指導や支援が将来の社会的・職業的自立に必要な能力や態度の育成に結び付いているかなどを検証し、それぞれの学校のキャリア教育の目標を改めて見直すことが考えられる。
- 定時制・通信制においては、今日、働きながら学ぶ者だけではなく、中途退学経験者や過去に高

等学校教育を受ける機会のなかった者等、様々な入学動機や学習歴を持つ者が入学している。加えて、社会的・職業的に自立していく上で困難な状況を抱える者も少なくないなどの指摘がある。このような多様な状況に応じた、きめ細かいキャリア教育を提供するため、例えば、特定の職業に就くことや資格取得につながるような職業科目を設ける等、教育課程を編成・実施する上での工夫をしながら、生徒の実態に応じたキャリア教育の目標を設定する必要がある。

(3) 生徒指導上の問題を抱えている学校における目標設定の工夫

- 生徒指導上の問題を持つ生徒は、自己の将来像に希望や可能性を感じていない場合が多い。そうした生徒には、働きかけの糸口となる活動を通して自分の得意なことに気付かせ、自己の役割意識や自尊感情を高めることにより、様々な活動への意欲につなげたい。
- キャリア教育では、学校が保護者や地域、各種専門機関との連携を深めることも大切である。「思いやりの心で共に歩む生徒の育成」「個性を伸ばし自分を高める生徒の育成」など共通の目標に向かって情報交換や連携を図ることが、生徒一人一人のキャリア発達支援につながっていく。
- 様々な体験活動やその事前・事後の学習での気づきを通して、学ぶ意欲の向上につなげたい。一人一人の生徒の状態を把握し、課題を明確にすることが大切であり、場合によっては個別の目標設定や指導計画を要する場合も考えられる。
- 生徒指導上の問題を改善することが、キャリア教育の推進と捉えることができる場合もある。生徒指導に重点を置きながら少人数指導の推進に取り組み、学ぶことへの関心を高めていくことができるような目標設定の工夫も考えられる。

なお、高等学校におけるキャリア教育の全体計画の例を次に示す。



キャリア教育の全体計画書式の一例

平成〇〇年度 キャリア教育の全体計画					
本校の教育目標：		本校生徒の実態：			
本校の目指す生徒像：		保護者・地域の期待：			
目指す学校像：		目指す教師像：			
本年度の重点目標：					
前年度の課題：					
キャリア教育の全体目標：					
教育活動を通して育成したい能力		人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
第1学年の重点目標：	教科の目標：			教科等の活動を通じて、それぞれの能力を養うための取組を具体的に記入する。	
	特別活動の目標：				
	総合的な学習の時間の目標：				
	道徳教育の目標：				
第2学年の重点目標：	教科の目標：			教科等の当該学年における目標を記入する。	
	特別活動の目標：				
	総合的な学習の時間の目標：				
	道徳教育の目標：				
第3学年の重点目標：	教科の目標：			教務、生徒指導、進路指導の各分掌が、キャリア教育実践のためにどのように関わっていくか記入する。	
	特別活動の目標：				
	総合的な学習の時間の目標：				
	道徳教育の目標：				
教務部		生徒指導部		進路指導部	
保護者・同窓会の連携：	事業所・企業との連携：	小中上級学校との連携：	NPO等との連携：	市区町村との連携：	
キャリア教育推進担当：	外部との連携担当：	活用できる指定事業：	評価の方法と時期：		

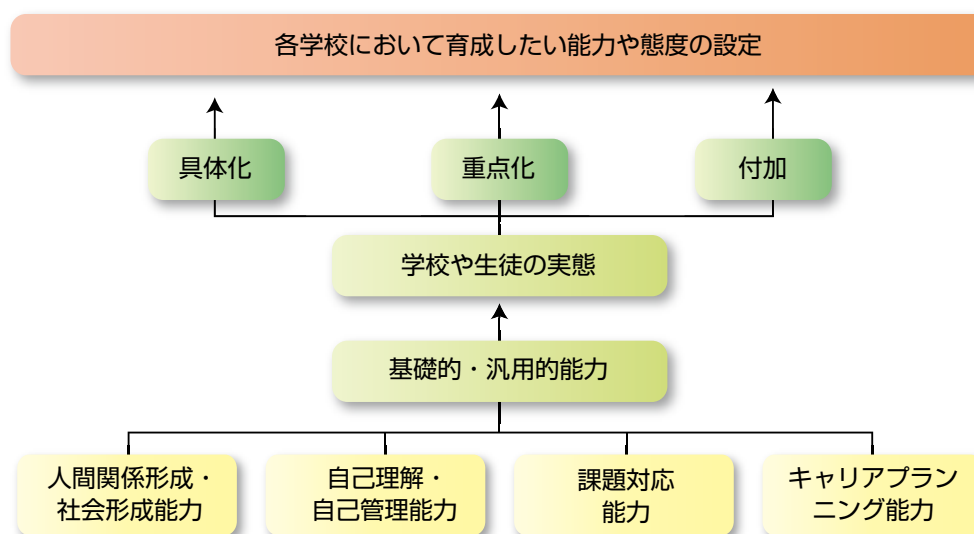
この学年におけるキャリア教育のねらいを記入する。

教科等の当該学年における目標を記入する。

教務、生徒指導、進路指導の各分掌が、キャリア教育実践のためにどのように関わっていくか記入する。

3 育成したい能力や態度の設定

自校で育成したい能力や態度の設定に当たっては、それぞれの学校・地域等の実情や、各校の生徒の実態を踏まえ、学校ごとに育成しようとする能力や態度の目標を定めることが重要である。



第1章第1節で整理した通り、「基礎的・汎用的能力」は「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」の4つの能力によって構成される。

これらの能力は、包括的な能力概念であり、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。これらの能力をどのようなまとまりで、どの程度身に付けさせるかは、学校や地域の特色等によって異なる。この4つの能力を参考にしつつ、それぞれの課題を踏まえて、具体的な能力を目標として設定することが重要である。そのためには、基礎的・汎用的能力の実態を調査し、その結果をもとに、自校で育成すべき能力や態度を重点化していく必要がある。

実態の調査に当たっては、生徒と共に教職員からは自校の生徒を、保護者からは自分の子どもを見る視点で同一の調査を行うことが望ましい。その結果については、p.75のようにレーダーチャートとして整理することも考えられる。このようなレーダーチャートからは「基礎的・汎用的能力」の4つの能力について、その現状のあらましを把握することができる。

また、このような実態調査の結果については、生徒と教職員の結果の差を踏まえつつ、それぞれの学校の実情に合わせた取組のための基礎的な資料の一つとして活用することが望まれる。

このように整理した調査結果については、次のような教職員の取組につなげることが効果的であろう。

- ① 分析の際に明らかになった課題を具現化することで育成すべき能力を重点化し、共有する。
- ② ①の課題が解決した「目指す生徒の姿」を考え、皆で意見を出し合う。その際、できるだけ授業場面と関連させた姿を各自で考える。
- ③ 各自が考えた姿を付箋に書き出した上で分類・整理し、「目指す生徒の姿」を設定する。
- ④ 「目指す生徒の姿」が発達の段階に適しているか、達成の検証が可能な内容・表現になっているかを確認する。

キャリア教育アンケートの一例

振り返ってみましょう。		年 組 氏名 ()		当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
あなたの日常生活（授業中や放課後、家庭での生活などの全般を含みます）の様子を振り返って、当てはまる番号に○を付けてください。							
①	あなたは、友だちや家の人の意見を聞くと、相手の立場を考慮して、その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか。	4	3	2	1		
②	あなたは、自分の考えや気持ちを整理し、相手が理解しやすいよう工夫して、伝えようとしていますか。	4	3	2	1		
③	あなたは、人と何かをするとき、自分がどのような役割や仕事を果たすべきか考え、分担しながら、力を合わせて行動しようとしていますか。	4	3	2	1		
④	あなたは、自分を振り返り、長所や短所を把握して、良いところを伸ばし、悪いところを克服しようとしていますか。	4	3	2	1		
⑤	あなたは、自分がすべきことがある時に、喜怒哀楽の感情に流されず行動を適切に律し、それに取り組もうとしていますか。	4	3	2	1		
⑥	あなたは、不得意なことでも、自ら進んで、取り組もうとしていますか。	4	3	2	1		
⑦	あなたは、調べたいことがある時、自ら進んで資料や情報を収集し、 <small>ひょうしん</small> 信憑性が高く、かつ、必要な情報を取得選択しながら活用していますか。	4	3	2	1		
⑧	あなたは、何か問題が起きたとき、次に同じような問題が起こらないようにするために、原因を調べ、課題を発見し、解決のための工夫をしていますか。	4	3	2	1		
⑨	あなたは、何かをするときに、見通しをもって計画し、評価・改善を加えながら実行していますか。	4	3	2	1		
⑩	あなたは、学ぶことや働くことの意義について考えたり、様々な働き方や生き方があることを理解したり、今学校で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。	4	3	2	1		
⑪	自らの将来について具体的な目標をたて、社会の現実を視野におさめながら、その実現のための方法について考えていますか。	4	3	2	1		
⑫	あなたは、将来の目標の実現に向けて具体的な行動を起こしたり、それを振り返って改善したりしていますか。	4	3	2	1		

※ アンケートの項目は、「基礎的・汎用的能力」の内容や趣旨を十分に踏まえた上で、それぞれの学校の教育目標、生徒の実状、学校・学科や地域の特色などを考慮して設定することが大切である。

※ このようなアンケートは、生徒のみならず、教職員や保護者に対しても行い、多角的に生徒の実態を捉えることが望ましい。

①～③……人間関係形成・社会形成能力

④～⑥……自己理解・自己管理能力

⑦～⑨……課題対応能力

⑩～⑫……キャリアプランニング能力

基礎的・汎用的能力と『キャリア教育アンケートの一例』との対応関係

基礎的・汎用的能力	アンケートの項目番号	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
	各能力における要素												
人間関係形成・社会形成能力	他者の個性を理解する力	○											
	他者に働きかける力		○										
	コミュニケーションスキル		○										
	チームワーク			○									
	リーダーシップ			○									
自己理解・自己管理能力	自己の役割の理解					○							
	前向きに考える力				○		○						
	自己の動機付け				○								
	忍耐力					○							
	ストレスマネジメント					○							
	主体的行動				○		○						
課題対応能力	情報の理解・選択・処理等							○					
	本質の理解								○				
	原因の追究								○				
	課題発見								○				
	計画立案									○			
	実行力									○			
	評価・改善									○			
キャリアプランニング能力	学ぶこと・働くことの意義や役割の理解										○		
	多様性の理解										○		
	将来設計											○	
	選択											○	
	行動・改善												○

各学校で育成したい能力や態度の設定

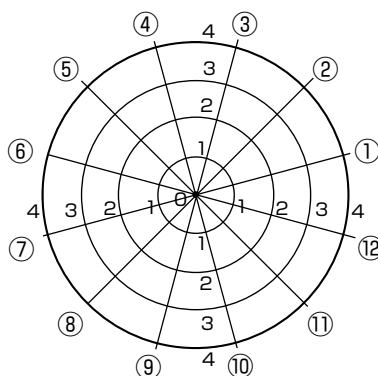
「基礎的・汎用的能力」の実態の分析及び課題の把握をするためのシート(例)

自己理解・自己管理能力

人間関係形成・社会形成能力

課題対応能力

キャリアプランニング能力



4 教育課程における位置付け

平成23年1月の中央教育審議会答申では、教育課程への位置付けについて「キャリア教育はそれぞれの学校段階で行っている教科・科目等の教育活動全体を通じて取り組むものであり、単に特定の活動のみを実施すればよいということや、新たな活動を単に追加すればよいということではないということである。各学校では、日常の教科・科目等の教育活動の中で育成してきた能力や態度について、キャリア教育の視点から改めてその位置付けを見直し、教育課程における明確化・体系化を図りながら点検・改善していくことが求められる」と指摘している。

このためには、各学校のキャリア教育の基本的な在り方を、学校の特色や教育目標に基づいて教育課程に明確に位置付けるべきであり、これらを通じて、全体的な方針や計画を定めておくことが必要である。キャリア教育を学校全体で推進するためには、キャリア教育の全体計画やそれを具体化した年間指導計画を作成することが不可欠である。全体計画を立案するに当たっては、自校の生徒に身に付けさせたい能力や態度などを、どのような教育内容や方法で、どのような場面で育成するのかを明確化しなければならない。

例えば、教科の活動の中で、教科の学びが将来の職業に結び付いていることを理解する。総合的な学習の時間で、自らの課題を設定して、探究的な調査研究活動を実施する。特別活動の学校行事の文化祭の時間で、クラスの企画を立案し運営していく。こうした様々な活動をキャリア教育の視点で見直し、全体計画に位置付け、相互に関連を持たせて実践することが重要である。また、職業調べ（仕事レポート）や職業人を招いての講話などについても、培った生徒の理解や認識を基盤としつつ、就業体験活動（インターンシップ）につなげる側面を持たせて取り組ませることも考えられる。インターンシップを実施する場合、既に多くの学校で、事前指導として「体験内容の調査や事前訪問」を、事後指導として「職場体験の記録のまとめ」や「職場体験報告会」の実践が見られる。これらの活動を一過性のイベントに終わらせず、キャリア教育の一環として期待される効果を十分に得るためには、インターンシップを通して身に付けさせたい力を具体的に設定して、その達成を図るための系統的な指導が不可欠となる。また、「教科の学習との関連は何か」、「将来の進路を考える上でどう役立つのか」などの観点から生徒に体験を振り返らせたり、身に付けさせたい力を視点としながら生徒の成長や変容を確認するためのアウトカム評価（p.119参照）を行ったりすることなどが効果的である。

各学校では、日常の教科・科目等の教育活動の中で育成してきた能力や態度について、キャリア教育の視点から改めてその位置付けを見直し、教育課程における明確化・体系化を図りながら点検・改善していくことが求められており、キャリア教育を通して育成すべき能力や態度をどのような内容や方法によって身に付けさせようとするのかを系統的に計画し、それを教育課程に位置付けていくことが大切である。

(1) 道徳教育との関連

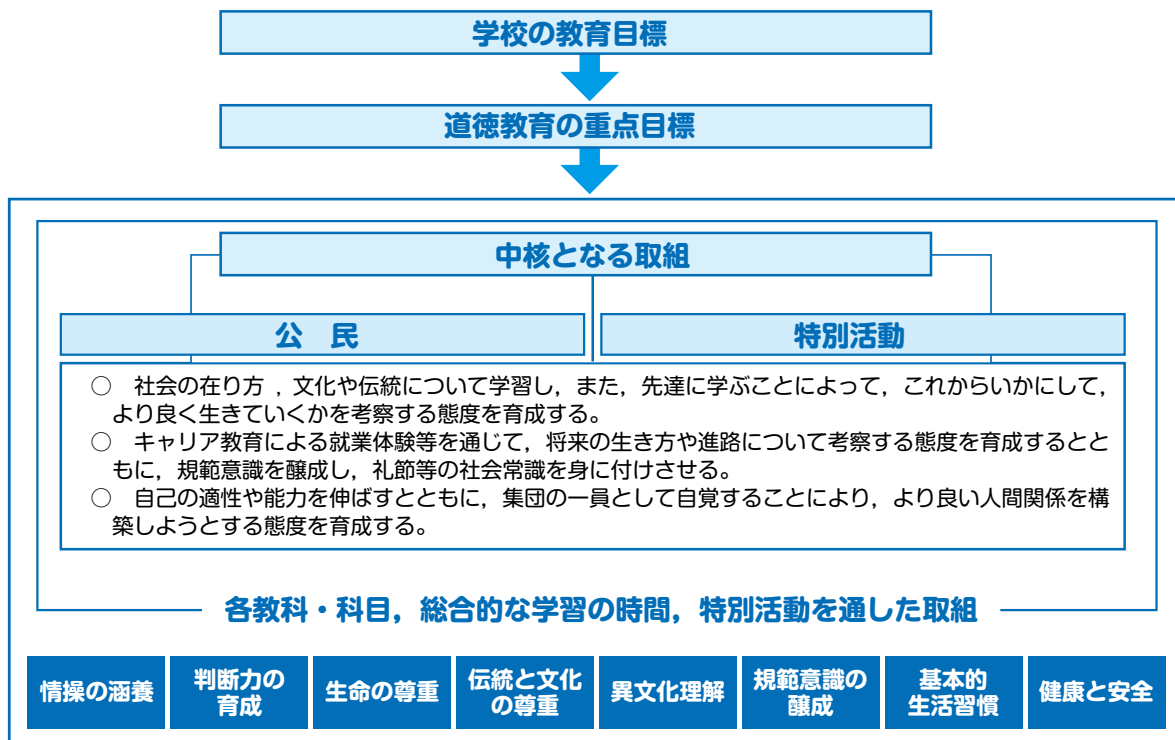
平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領第1章総則（第1款教育課程編成の一般方針）には、「学校における道徳教育は、生徒が自己探求と自己実現に努め国家・社会の一員としての自覚に基づき行為しうる発達の段階にあることを考慮し人間としての在り方生き方に関する教育を学校の教育活動全体を通じて行うことにより、その充実を図るものとし、各教科に属する科目、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、適切な指導を行わなければならない」と示されている。また、高等学校段階の生徒は、自分の人生をどう生きればよいのか、生きるの意味は何かなどを思い悩む時期である。また、自分自身や他者との関係、さらには、広く国家や社会について関心をもち、人間や社会のあるべき姿について考えを深める時期でもあり、それらを模索する中で、生きる主体としての自己を確立していくことの大切さを学ぶこととなる。

高等学校において、道徳教育を進めるに当たっては、特に、道徳的実践力を高めるとともに、

自他の生命を尊重する精神，自律の精神及び社会連帯の精神並びに義務を果たし責任を重んずる態度及び人権を尊重し差別のないよりよい社会を実現しようとする態度を養うための指導が適切に行われるよう配慮しなければならない。

高等学校では，小・中学校における道德教育を踏まえつつ，道德教育をキャリア教育と組み合わせながら実践していく必要がある。

道德教育の全体計画の例



(2) 各教科等との関連

高等学校におけるキャリア教育では，教職員が自ら担当するそれぞれの教科等との関連を図ることが極めて重要である。日常の学習や生活は，自分の進路や将来設計に関心・意欲を持つことによって，大きな影響を受ける。つまり，「なぜ勉強しなくてはならないのか」，「今の学習が将来どのように役立つのか」ということなどについての発見や自覚が，日常の学習に対する積極的な姿勢につながり，各教科等においても学習意欲の向上が期待される。

そこで，それぞれの教科・科目を学ぶ中で，教科・科目の学習と現在及び将来の生活を結び付け，学ぶ意義を理解し，学ぶ意欲を高めるようにキャリア教育に取り組むことが大切になる。そのようなことからそれぞれの教科において，教科・科目の担当者が，学ぶことの楽しさや，実生活や社会活動との関連について，伝えていくことが求められる。

それぞれの教科・科目の指導を通してキャリア教育を進めるポイントとして，次の3点が考えられる。

- ① その教科・科目で学んでいる内容が生活に活用されている場面を伝える。
- ② その教科・科目を学ぶ面白さを伝える。
- ③ その教科・科目を学ぶことによって培われる能力・態度とそれらの意義を伝える。

また，これら3点はそれぞれ

- ・ 単元や題材の内容そのものに関すること
- ・ 指導手法に関すること
- ・ 教科等を学ぶ上での習慣・ルールに関すること

に区分することが可能である。

単元や題材等の内容が、職業や社会生活等に強く関連する場合、社会的・職業的自立の基盤となる「基礎的・汎用的能力」を育成する視点からの指導は、当該単元・題材等のねらいを実現するための有効な手立てともなり、キャリア教育の視点からの積極的な取組が期待される。例えば、公民科や家庭科を通じて、今日の社会が分業によって成り立っており、職に就き、働くことを通じてその一端を担い、人々が相互に支え合っていることを理解することや、労働者としての権利や義務、雇用契約の法的意味、求人情報の獲得方法、人権侵害等への対処方法、相談機関等に関する情報や知識等を学習すること、また、人の一生の中で大きな要素となる「仕事」と「家庭生活」の調和の取れたライフスタイルを創造するために必要な知識等を学習することなどは、その典型であろう。無論、教科・科目の内容に直接かかわるキャリア教育の実践は、この他にも多様に考えられる。その具体的な例は、本章第4節「2各教科と年間指導計画」(p.81-p.88)を参照していただきたい。

また、各教科等の指導にあたっては、単元や題材の特質や、生徒の実態を踏まえ、具体的な方法を工夫することになる。例えば、コミュニケーションの力が未熟であるとか、協調性に乏しいなど、「基礎的・汎用的能力」の視点から見た生徒の実態等を受けて、繰り返し発表の機会を設ける手法や話し合い活動を重視する手法、少人数のグループ活動によって明確な役割分担を行う手法など、多様な取組が考えられる。

さらに実際の教育活動においては、準備物の徹底、提出期限の厳守、発言・傾聴のルール、片付けの仕方など、ルールや規範などにかかわる多様な指導が行われている。これも、将来の社会的・職業的に必要な諸能力の視点で整理すれば、キャリア教育の大切な要素となることを全教職員で共通理解したいものである。

このような多様な視点で授業実践を捉え、各教科等で学んだことが生活全般にわたって自分を支える能力や態度などの基本を形成していることなどを伝えていく必要がある。

また、各教科等における取組は、単独の活動だけでは効果的な教育活動にはならず、取組の一つ一つについて、その内容を振り返り、相互の関係を把握したり、それを適切に結び付けたりしながら、より深い理解へと導くような取組も併せて必要である。その重要な機会として、総合的な学習の時間や特別活動におけるホームルーム活動を捉えることが求められる。

総合的な学習の時間は、主体的な判断力やよりよく問題を解決する力の向上、学び方やものの考え方の習得、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度の育成などに加え、「自己の在り方生き方を考えることができるようにする」ことを目的とする教育活動であり、「基礎的・汎用的能力」を身に付けさせる場としても極めて重要な役割を担っている。このような総合的な学習の時間の指導計画作成に当たっては、「各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること」が極めて重要である。

また、特別活動におけるホームルーム活動は、本『手引き』第1章第3節2(p.41-p.42)で詳しく述べたように、高等学校における進路指導・キャリア教育の中核的な実践の場である。高等学校学習指導要領は、この点を踏まえ、「〔ホームルーム活動〕を中心として特別活動の全体を通じて、特に社会において自立的に生きることができるようにするため、社会の一員としての自己の生き方を探求するなど、人間としての在り方生き方の指導が行われるようにすること。その際、他の教科、特に公民科や総合的な学習の時間との関連を図ること」と定めている(第5章第3(1))。

総合的な学習の時間や特別活動におけるホームルーム活動などの機会を活用し、断片的にとどまりがちな各教科等におけるキャリア教育の取組を振り返り、相互の関係を把握したり、それを適切に結び付けたりしながら、より深い理解へと導く指導が求められている。キャリア教育の全体計画の作成に当たっては、これらの点を包括的に視野におさめ、学校の教育活動全体を通じたキャリア教育を構想したいものである。

(3) 進路指導との関連

キャリア教育と進路指導との関連については、本『手引き』第1章第2節において詳しく解説したが、ここでは教育課程における進路指導とキャリア教育に焦点を絞って整理する。

進路指導は、今日まで「教育活動の全体」を通じて実践されるものと一貫して位置づけられてきた。例えば、昭和53年版高等学校学習指導要領総則では「学校の教育活動全体を通して、個々の生徒の能力・適性等の的確な把握に努め、その伸長を図り、生徒に適切な各教科・科目や類型を選択させるように指導するとともに、計画的、組織的に進路指導を行うようにすること」と定められ、平成元年版高等学校学習指導要領でも総則において「生徒が自らの在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」とされている。

また、これまで指摘してきたように、キャリア教育は「教育活動全体を通じて取り組むもの」であり、この位置づけも提唱時から保持されてきた。例えば、平成16年の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」及び平成18年に文部科学省が作成した「小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き」は、いずれも「キャリア教育は、学校のすべての教育活動を通して推進されなければならない」と明示している。

つまり、進路指導もキャリア教育も共通して「教育活動全体」を通じて行うものであり、教育課程上の両者の位置付けに差異はない。更に、高等学校におけるキャリア教育と進路指導とは、第1章で整理した通り、その概念やねらいもほぼ同一と言える。それゆえ、平成21年3月に告示された新しい学習指導要領総則では、「生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行い、キャリア教育を推進すること」と、進路指導とキャリア教育を併記したのである。

本『手引き』第1章第2節で整理した進路指導の理念と教育課程上の本来の位置付けを十分に理解して進路指導に取り組んできた学校では、これまでの進路指導の全体計画をほぼそのまま活用し、それを軸にキャリア教育の全体計画を作成することが十分可能である。その際には、キャリア教育が幼児教育の段階から高等教育に至るまでの系統的・体系的な教育であることに十分留意し、小学校及び高等学校等におけるキャリア教育との接続や連携も視野におさめた全体計画へと改善を図る必要がある。

その一方で、事実上、入学試験・就職試験に合格させるための支援や指導に終始する取組（いわゆる「出口指導」）を「進路指導」と称してきた傾向の強い学校では、キャリア教育の全体計画の作成において、これまでの「進路指導」全体計画の大幅な見直しが必要である。無論、高等学校は、職業選択に密接に結びつく上級学校への進路選択や就職に向けた進路決定を迫られる時期であり、入学試験や就職試験に合格させるための支援や指導も当然に求められる。このような指導も入学から卒業までを見通した系統的なキャリア教育の中に包含して位置づけ、キャリア教育の全体計画を作成していくようにしたい。

